

溝口研究室の一学生の研究履歴

2015.01.18

2008 大学入学	高校のとき、農学部に入って植物医科学をやろうと思っていた。まわりがみんな医学部に進むので違う道に進みたかったことと、家族に医学部を薦められるのに反抗して東大受験に切り替えた。幸運なことに大学に入ることができたが、植物医科学に関する講義を受けたものの高校の時のような興味を感じることができず、2年次の進学振り分けで何を選択したらよいか見失ってしまった。大学の友人が農学部に進学するというのでわけを聞いてみると、彼女の選んだ学科では研究室選択のときに学科内の研究室に限らず農学部内のほかの研究室を選べて選択肢が多いというので、自分の興味の方向がわからなくなっていた私はそれに惹かれて同じ学科を選んだ。
2010 農学部進学	農学部というところは思ったよりも幅の広い学問だった。農業経済、農業工学、農業化学などあるところは小さな大学という別名のとおりで、いろいろな分野に触れるのに適したところだった。カリキュラムの中でいろいろな話をきき、いろいろな実習に出かけ、1, 2年次に比べれば比較的現実的に自分の興味を探ることができた。1, 2年次で数学や化学などの机上の学問に興味を持てなかったのは自分の頭が足りないからだと思っていたが、振り返ってみると自分は実学的な分野の方が好きで、理論については大学以上のレベルに興味を持てなかったのだという気がする。 さて、そんな中で農業情報学に興味を持つことになった。パソコンやプログラミングに興味があったわけではないが、好きな気持ちはあった。スマートフォンが普及し始めて、携帯端末でできることが格段に広がった時期だった。なんとなく、これからの動きがおもしろそうだと思っていた。国際開発農学専修の溝口先生はインターネットの黎明期から農業でのITの活用を図ってきた農業情報学の第一人者であって、人好きのする人物なので、研究室を選ぶときには迷わず溝口研究室を選ぶことになった。 そして大学最後の4年次で、最大の試練に当たった。研究室に配属されたからには卒業研究をして、卒業論文をまとめなければならない。溝口先生は学生の研究に関して自由主義を貫く教授で、学生が興味に合わせてテーマ選択する自由を与え、研究手法や進め方については適切に指導するというスタイルをとっていた。大学では自分の研究の端っこのテーマを学生にやってもらうというパターンが多いためこのような先生は貴重だが、学生にしてみればこれほど大変なことはなかった。なにに興味があるのかわからないまま、あれこれ手を出してみてもテーマを模索し、自分でネタを見

	つけてこななければならない。博士課程であっても難しいのに、4年生がやるのだから難しい。人によってはうまくいかないまま卒論提出期限が迫り時間切れ（先生がテーマを渡す）、ということもあった。 私はというと、4月から研究だ！と意気込んだものの上記のとおり、自分でテーマを探してこななければならないので、迷走した。いろいろと手を出したがどんなテーマが研究に向いているのかもよくわからないので、ほんとうに困った。このあたりの指導があまりない代わりに、溝口先生は自分の研究の現場に私たち学生を連れて行ってくれた。あるとき溝口先生が小学校でバケツ稲を育てさせて土の科学を教えている現場に TA として付いていった。その場でオモシロイと思ったわけではなかったが、断れない性格もあって何度か手伝いに行った。結局はこの小学校でやっていることをもとに研究することにした。バケツ稲の横には当研究室が設置したフィールドセンサーがついていて、なんとなく農業と IT と教育を噛み合わせることでできれば研究になるのではないかと思った。結局卒業研究でできたことは研究といえるほどの内容はなかったけれど、ここでやったことがその後の研究のベースになった。
2012 大学院修士 課程進学	進学して研究テーマを変えることもできたが、卒業研究で満足な内容ができなかったので続ける気になった。もう少しうまくできたのではないかと思うところがたくさんあった。そこで卒業研究を修正しつつ引き続き農業と IT と教育を噛み合わせようとした。修士1年のときに行った試行ではだいぶうまくいったが、そこで気づいた。テーマを続けるのであれば、前よりも新しくわかったことがなければ研究にならないということで、卒業研究と何が違うのか、というところで立ち止まることになった。たしかに卒業研究と比べるとだいぶ詳しく調べることができていたが、テーマの広がりにはなかった。そこで、半年以上の時間を消費（浪費）し、迷走した。この頃、就職活動やら国家公務員試験やら、他にやることがいろいろあったので大義名分を得たと思って積極的に研究から逃げていた。時間切れ間近（M2の10月）になって焦り、とうとう別テーマを始めてみた。農業と教育に関する取り組みを続けていて、小学生はどんなふうに農業をとらえているかということが気になり始めたことがきっかけだった。それに加えて、農業をどう教えたらいいか、ということにも興味を持った。そのとき卒業研究と M1 でやっていたことに興味をもってくくださったある市の教育委員会と農業 IT を使った教育プログラムをやっていて、間接的にたくさんの学校と繋がりを持っていたので、たくさんの児童を対象にして農業と教育に関するアンケート調査を行った。実施は12月で、発表できるような結果が出るかは博打だったが、なんとか修士論文にまとめるだけの材料が作

	れた。それから急ごしらえの新しいテーマと卒業研究以来やっていたテーマをどうにか一つのテーマとして関連づける作業にかかり、それはそれで苦労があったが修士研究にまとめることができた。
2014 大学院博士課程 進学	修士研究の最後で新しいテーマを見つける楽しみを感じ、二つの研究をまとめたということと、なかなか良い評価を貰えたことが自信になり、研究を続けてみようかという気になった。就職は決まっていたが、分野としては大きく離れていないので、仕事も研究に活かせるのではないかと思った。スタートは良かったが、今度は博士研究で、修士研究から進化させなければならない。ここからまた、迷走の時期が始まるのだろう。と思っていたら、やはり1年迷走した。仕事を始めたことが免罪符になっていて、研究は全然進まなかった。 でもまあ、これまでの自分を振り返ると、迷走してからが勝負で、諦めなければきっと糸口があると思う。 (2015.01.18)

